

## 国語教育史明治初期の研究(二)

渋谷 宗光

### 一 はじめに

わが国における国語教育の歴史的現実を知ることによって、現在の諸問題についての解決を図ろうとし、また、将来への展望を可能にするために、この研究を試みたい。目的は、歴史的現実の時代時代における特徴を知り、それらを通して考察し、国語教育史を叙述しようとするものである。研究を進めるのには、どのような考えをもち、具体的な方法を取ればよいのか、構想を立て、準備をしなくてはならない。

そのためには、今までになされた先人の研究を参考にしていきたい。その導きによって、国語教育史を明らかにしたいと思う。(叙述にあたって、敬称を氏としたことをおゆるしいただきたい。)

国語教育が、明治初期にどのように行なわれていたかについて、今、私は自分なりに資料を整理しはじめたばかりの段階である。この研究は、まず、近代期の初めとしての国語教育を知り、さらにわが国における国語教育の歴史を明らかにしようとするものである。

歴史的現実を知ることには先を見通すためのものであり、また、後を振り返るためのものである。国語教育史については、学校教育における国語科の立場を確かめるためにも、現段階において、研究の意義が認められると思う。地方教育史のなかにも、国語教育史については研究が進み、それらはすばらしい成果をあげつつある。また、中央的な

立場からの、「学制百年史」(昭和四十七年十月一日発行、帝国地方行政学会)が文部省によって、九十年史に続いて、完成している。これは、明治・大正・昭和の三代を通じての学校教育史を総まとめにしたもので、「記述編」と「資料編」とからなっている。教育史研究には、いろいろな方法があり、その叙述で諸問題が取りあげられている。それらの研究によって、国語教育は、歴史のなかでどのような位置を占めて、どのように変遷してきたかが示されようとしている。

ここに、対象となる国語教育と国語科教育との関係を考えることにする。国語教育は広義に考えられており、学校教育のなかでの国語科の学習指導を一般に国語科教育といっている。学校教育の教育課程でその一教科としての国語科はいかにあるのがよいのか、実践の効果はどのようにあがっているかを知ることが、国語教育史の主問題である。近代の学校では、時代時代、当時の制度によって示された基準によって、各教科の教育は実践されているが、そのためには、科学的な方法が必要である。国語科教育は、理論や体系が必要となり、教科教育学としての国語科教育学が求められている現状である。現段階で国語科教育の志向は、旧来の考え方を評価し、反省によって新しいものを求めている。国語科は、教育課程のなかでの一教科としてあるばかりでなく、教育課程全体のためのものであるということを自覚し、国語科が学校教育の教育課程で占める位置、役割を知る必要がある。

対象を見る立場として、時代の移り変わりを貫いて生きているわれわれは、歴史を知ることによって、日本のものとしての、日本人の生き方がわかる。そのなかで、国語を学ぶことは、言語生活と言語文化の両方にかかわるのであり、国民の生存に関することである。明治初期に始まる日本の近代期は、和・漢・洋の三体を調和させ、そこに享受と摂取とそれらによる創造によって、みずからのものとしての普通のものを求めていたといつてよいであろう。明治初期を知ること、近世期につながる近代初期を知ることであるが、幕藩体制の終結は日本にとってどんなものであったかは、他からの強制でなかったという自信のもとに無批判となり、真実はまだよくわからないという現状である。歴史の流れは、大きな波のようなうねりを見せている。国内の自発的な事件であったわが国における明治維新は、実践と思想において全く驚くべき変革の時代であった。この時代における国語教育の特徴をよく記述するようにしたいものである。

このように、歴史的考察をするのに、注意しなければならないことを、ここに述べたい。①人物、事象などを史実として取り扱う場合は、根拠のある資料によって確かめなければならないので、真実なるものを求めることを心がけたい。文献主義による方法論は、ぜひ必要である。歴史を文献でとらえるのは危険な方法であろうが、言語的思考の構造化をするのには、文献によることが確実である。まことの文献を探すことになる。文献以外のものも確実なるものは、科学的な方法と判断によって、史料とすることを否定してはならない。②歴史を把握するのには、縦と横の総合された関係を概観的に見る方法が大事である。生活史、文化史、文明開化による出版機械などの歴史とも関連を図りながら広く深く考察すべきである。せまい国語科だけの箱庭的な見方では、雄大な風景は眺めることはできないであろう。関連していたのに気づけなかったことに、意外な事実がかくされているものである。③教育の成果は伸びていく子どもにあるのである。教育の歴史的現実、学校教育の事実であり、国語の力の流れである。そのため

に、児童・生徒の国語の力の追跡的な調査を、学校段階において試みることを考えるべきであろう。

以下、この研究を進めるにあたって、考え方、方法、準備などについて、観点の数項目を述べることにする。それらは、国語教育について、現在の時点で筆者が考えていること、また、改善したいと思っていることなどを含めて述べているので、今後、さらに批判をし、客観性のあるものになるよう、不足のところは補い、改めるべきところは正していきたいと思います。

## 二 国語教育史の考え方

国語教育史の叙述においては、言語と文学とを含めた国語の歴史と、国全体の教育の歴史という二つのことが関連しているのであるが、まず、歴史のなかにおける国語教育の事実をどのように考えるかが、前提となる。広義に考えると、①国語教育を学習指導の事実とし、そのための計画、方法、教材、条件整備のことなどがある。②国語教育についての評論や理論もある。③国語教育はいかにあるべきかという立場からの学問体系が含まれる。この学問体系については、国語教授法、国語教育法、国語教育論、国語教育学、国語教育科学、国語科教育学の名称で、それぞれの特徴をもっている。

このように国語教育史は広範囲にわたるものであるが、さらに、先に述べたように、国語と教育とに関連するので、④国の施策としての国語国字問題の歴史、また、⑤国の行政にもつながる教育制度などの歴史が関連している。

叙述の方法としては、これらについて、通時的に、あるいは、共時的に見るものがある。また、概観総合的に、あるいは、事項分析的に見るものがある。実践からのものがあり、理論からのものがある。国語教育史の叙述は、全般に眼をくばりつつ、鏡にうつる全体を見つつ、そのなかの個々を想定して叙述することになるであろう。国語教育あるいは国語科教育はいかにあるかという課題から、諸観点による



叙述は可能であると思う。人物史も、その人を中心として、実践史あるいは理論史として見ていくことによって、事実と思想とを知ることができる。

歴史のなかにおける国語教育を事実史的に考えることは、単なる事実の羅列ではなくて、どのように歴史のなかで生きた国語教育がなされてきたかという事実を知ることであり、また、国語教育のためにどのような努力が、実践と学問においてなされてきたか、さらには、国語教育の効果が過去からどのように現在につながり将来へと続くかを知ることである。

教育は児童・生徒を人間として育成することであると考えるとき、国語教育は広義の教育的事実として学習指導の歴史が主となるのである。次代を担当する児童・生徒の国語の力が伸びていく事実（学習の事実）、親や教師が生活・文化の知識や技術と伝授していく事実（指導の事実）、そのような学習指導をしている事実が歴史の現実として把握されることこそ、国語教育史であると思う。このような観点に立つと、制度や学問の事実を把握するとともに、言語による作品や教材を理解し表現する児童や生徒の能力あるいは学力、すなわち、国語の力がどのように時代時代においてあるかというその成長を調べなければならぬ。これについては、個々の人の成長とともに、それらの集合としての国民の読み書き能力が問題となる。

国語教育史で求められる国語教育の歴史的事実は、この国語の力であるとする、その調査と把握とは最も困難である。当時当時の学力測定は条件を一にしていない点がある。過去における教育のあり方としても、学問や為政のための場合と、生活や教養のための場合とは、いわゆる大学と小学の教育では異なっていると考える。記述物一般、著作、教科書および注釈、また、辞書などによって知る方法もあろう。学校制度の整備した近代の国語教育でも、教科書、習字作品、作文（広義のもの）、文集・雑誌・新聞、投稿作品、購買図書など、また、学力を知るのにはいろいろなものがあるが、理解力と表現力とを推定

する方法が可能であれば、成功するであろう。最も科学的な操作が必要である。判断の資料は、文献以外のものもある。話しことばによる伝承からも知ることができよう。また、個々の人の成長史そのものが、確実な資料であるともいえる。

国語教育あるいは国語科教育についての論、また、その学問をどのように現代で考えるかは、後に述べることにするが、理念・思想、計画・方法、指導内容・領域、教材・設備、学力・評価などが、研究の範囲に含まれる。生活・文化、施策・制度も、これらと関連している。

国語教育史を文学史と比較するとき、文学的事実はどのようにとらえられているかを考えたい。元来は、文学は文芸を含めたものとし、言語も含めた人文の学問であると規定される。わが国における文学という概念は、歴史をさかのぼると、近世のころ、鈴木朗は、「離屋学訓」に次のように、学問の定義のところに、「德行、言語、政事、文学ノ四科ノ材ヲ成就センガ為ノミナリ」と述べている。德行、言語、政事、文学を総括して、「文学」といつている。文学という用語は、明治中期においても、「本邦文学之由来」（島田篁村先生序、矢野龍溪先生序、黒木安雄著、明治二十四年九月二十八日出版、博文館）「文学一班」（不知庵主人述、明治二十五年三月一日出版、博文館）が出ているように、学問とする近世的な考え方と文芸とする近代的な考え方が併存している。

文学を学問史として見るのではなくて、文芸として見る文学史の場合は、基になるものは、表現創作された文芸作品であるが、その真の文学史は、文学的事実の歴史であるとするとき、①表現創作からのみの歴史ではなくて、②読書鑑賞の歴史も考えられなくてはならない。さらに、その表現創作と読書鑑賞とのそれぞれに、あるいは、両方にわたって、③評論・理論・批判の歴史が必要である。また、①、②、③に関する学問研究の歴史がともなってくると思う。発表された創作の歴史は、散逸・未刊のものもあるが、多くのものは、自筆稿本、写本、版本、印刷物等によって、その事実を知ることができよう。読書鑑賞の



歴史は、随筆、日記、書簡などによって、あるいは、作品のなかにおける記述によって知ることができよう。また、書写した本や購買圖書の事実、出版などの事業によっても知ることができよう。文学的事実は、生活のなかで営まれるものであり、量的な問題とともに質的な問題であり、文学は享受され創造されていくと思われる。いずれにしても、文学作品の現実としての存在が根本になっている。それをめぐっての本元的探求は、思想の問題であり、人間はいかに生きべきかという問題につながって、文化と生活、あるいは、宗教や哲学との関連をもつのである。その文学史には、文学史の学問としての文学史学の歴史もはいつてくるであろう。歴史的考察は、事実や学問の把握を通してなされるが、歴史の叙述はその歴史の叙述自体に歴史的批判が加わってくると思う。

### 三 国語教育史と国語教育論史

垣内松三氏は、その独立講座「国語教育学」第五巻の「国語教育論史」において、「(われわれはまだ国語教育史の統一的叙述を有ってゐない)」と述べている。(昭和九年十一月二十二日発行、文学社) 実は、この「国語教育学」は、後に記述するように、計画として全十二巻であり、その第九に「国語教育史」が予定されていたが、出版されていない。その点は、問題として残っている。

ここには、「国語教育論史」に述べられたことを紹介したい。まず、国語教育史と国語教育論史とは、それぞれ別のものであるとしている。文学史と文学研究史、言語史と言語学史との区別と同じように、国語教育史は事実そのものを対象とし、国語教育論史は思想を対象とするものであると述べている。この事実と思想との交渉をどのように分けるかに困難点があるとしている。教育論史的観点からは、単なるいわゆる教育史が事実を対象とするのであるか、思想を対象とするのであるか、その志向が明らかでなかったとし、二つの理由をあげている。

その第一の理由としては、事実と思想との必然的な交渉が両者の分離を困難にするといふことである。思想は常に「何ものかについての思想」であることをその本質とする。教育思想の歴史としての教育論史は、教育の「事実について」の先人の考察の歴史である。従って教育論史は、必然に、事実としての教育の歴史を予想する。われわれが、ここに一時代、一個人の教育論を述べようとする場合に、当時の教育の実状を知らなければならぬことは、後者がその環境であり母胎であるからである。

また、事件としての歴史そのものの本質が、事実と、事実についての思想の区別ができない。まして、記録は記録者の思想である。このように、事実と思想との明確な分離が、歴史の領域で最も困難なのに、さらに教育史の領域では、加重される傾向であるとし、その理由をあげている。

その理由の第一は教育についての思想は、その目標として、当為を対象とし、ある意味から見れば既に実践的性格を含むものであるという点にある。すべての思想が、事実から生まれて事実に戻る限り、必ず実践的なものを含むべきであるのであるが、教育の領域に於ては特にそのことが要求せられてゐる。教育論は、これまで、常に、教育の実状を明日にその目標に置いて、多分に実践的な執意の下に提出せられて来たといふことが、両者の分離を一層困難ならしめてゐるのである。

第二の理由としては、「科学的考察の発生」が比較的新しいので、教育論史あるいは教育学史の成立も遅れ、いわゆる教育史としているという考え方である。なお、結びとしての考え方が微妙であるので、引用する。

教育史と教育論史とを区別して取扱ふには、以上のやうな種々の困難があるのであるが、それはただ困難といふのみで、両者を別箇のものとするを不可とするものでも、不必要とするものでもない。否、その必要は教育に対する科学的考察の確立が要求せられる



に至って、益々痛感せられてゐる。

このような考え方で、国語教育科学の成立を想到した垣内松三氏は、「国語教育科学の前身として観たる国語教育論史」を規定している。

次に、彼は国語教育史の構想と国語教育論史のことを述べている。従つて、われわれは、ある一個人或は一時代の国語教育論に対して、当時の国語教育の実状、更に進んでは、当時の精神的物質的世界の実状と比較考量して、その必然性を明らかにし、その発生発展、消滅の過程を辿るよりも、むしろ、これを現代の国語教育科学的思维に照し、その解明に須要なる前史としてわれわれの国語教育科学的思维を明確にすることを、国語教育論史の主要な目的とする。前者の方向、即ち、その時代の国語教育の事実及びその精神的物質的世界の事実との交渉を明らかにすることは、これを、別に、「国語教育史」の問題として取扱はなければならないと考へる。勿論国語教育論も広義に於ける国語教育の事実の展開に於ける重要な一部を荷担するものであるが、「国語教育史」に於ては、その立場に従つて、事実と思想の両者を統一し、これをなほその他の世界の発展の中に位置づけることが要求せられなければならない。(第九卷「国語教育史」参照)従つて「国語教育史」と「国語教育論史」とは自らその象面を異にしなければならぬ。

これによると、国語教育史をどのように方向づけようとしていたかを知ることができよう。国語教育論史は、国語教育科学の諸問題についての本質的考察に基づいて、それぞれに時間的展開の諸相を整理しようとするものであるとし、各章の意図を述べ、最後に次のように述べて、この本の序説を結んでいる。

国語教育科学の前身としての国語教育論史の問題を以上のやうに區別して取扱ふとして、その範囲内に於て時間的な順序を追ふものであることはいふまでもない。ただ材料の選択と全体の考察態度に於ては、常に、国語教育科学の問題状態に対する関心を基としなけ

ればならぬ。その点に於て、単に縦の排列でなくて、却つて横の排列をも採らなければならぬ。なほかうした問題設定に従つて、我が国語教育論の進展を明らかにするためには最近に於ける交渉の事象に鑑みて、叙述の対象を世界各国の国語教育論史に拡大しなければならぬ。そのために、明治五年、明治三十三年以前に於ける社会上層に属する知的美的、倫理的教養を主とする諸意見及び庶民教育の抬頭以来教育令發布に至る諸事象に就いては、一応それぞれの専門の研究に委ねるとしても、明治初年から国氏精神の自覚に伴ひて、俄に勃興せる国語教育の考察と頻繁に交渉を保つに至つた世界各国に於ける国語教育論との関係に就いては、却つて多くの部分を割かなければならぬ。しかもそれ等の複雑なる交渉を整理し批判し、統一して今や小学国語読本の発刊と共に、多年の思索と経験とに基づきて新興国語教育の建設の基礎が堅固に構築せられんとする我が国に於ける独自の展開に就いてはこれを結語に於て略述を試み、その前程を展望しなければならぬ。

この本は、序説(国語教育論史の問題)、第一章言語教育論の勃興、第二章新人文主義と言語教育論、第三章古典的教育学と国語教育論、第四章実験的教育学と国語教育論、第五章精神科学的教育学と国語教育論、結語(国語教育科学の動向)、この七部分からなっている。

この大構想の国語教育論史は、わが国の国語教育科学の建設のために、実は西洋古今の言語教育論、国語教育論が述べられている。わが国の国語教育論は、新たな国語教育科学によると考へてのためか、ふれられていない。結語に述べられたことは、「国語教育科学概説」(昭和九年四月三十日発行)の後であるので注意したい。ここでは、前史として、それぞれの進展の標徴としての学説に就いてその展開を尋ねて来たと述べている。

思うに、国語教育史と国語教育論史とは、理論史としての叙述が事実との関係をふまえる必要があるところに困難な点があるのである。このことは、逆に、事実史としての国語教育史の場合も同じである。



叙述の手に思想があると考えると、また、史観があるとすると、おのずとそのように叙述するであらう。そこをどのように史としての純粋性を維持するかに問題がある。制約ということもあるのである。事実として客観的なものを見るか、事物を客観的に見るかということも関連して、教育史の叙述者はじゅうぶんに慎重にしなければならない。見る眼が大事になる。

広義の国語教育史を考えると、その広義なる理由で、叙述のための組織を科学的にする必要がある。そのための資料には、数多くのものがある。垣内松三氏との関係で、飛田隆著「国語教育科学史」(国語科学講座、昭和八年七月十九日発行、明治書院) および渡辺茂著「国語教育史」(国語科学講座、昭和八年十一月三十日発行、明治書院)がある。

「国語教育科学史」によると、対象を規範的国語教育科学とし、方法を問題史的に叙述しようとしている。その構想に、科学があり、哲学があり、国語観があると思われる。垣内松三著「国語の力」(大正十一年五月八日発行、不老閣書房)以後の形象理論の主流をたずね、同じく垣内松三著「形象と理會」(昭和八年四月十五日発行、文学社)にいたるまでの思索の展開をたどることによって、国語教育科学史を叙述しようとしている。

「国語教育史」によると、同じく国語教育科学の立場から、叙述されているが、歴史的考察において特徴がある。「国語教育は文化事実として最高義の言語教育である。」という事実を追求して国語教育史を叙述しようとしている。歴史的考察に、特殊な「時」の設定がある。これは、時代区分の考え方であるので、後に述べることにする。

教育史研究で国語教育と関係の深いものに、吉田熊次著「本邦教育史概説」、石川謙著「日本近世教育史」「日本学校史の研究」、海後宗臣著「国語教育問題史」、仲新著「近代教科書の成立」がある。「日本教育史学会紀要」(第一巻)には「漢字漢文教育史」が特輯されている。志田延義著「国語科教育学」に記載されている「平安貴族の学習

資料形態」および「国語科教科書前史略年表」は貴重である。

近代の国語教育史について、国語教育学の史的展開を叙述されたものに、野地潤家氏の左記の研究がある。指標となる資料である。

「国語教育学の史的展開——その戦前における国語教育学の展開」(学校教育研究所年報一九五八)(昭和三十三年四月三十日発行、学校教育研究所)

国語教育史の資料のうち、「岩波講座国語教育」のものがある。柳田国男著「昔の国語教育」(昭和十二年七月十日発行)、保科孝一著「現代社会と国語教育」(昭和十二年二月十日発行)(石川謙著「中世以降に於ける国語教育の発達」と合冊されている。)、井上越著「小学読本編纂史」(昭和十二年二月十日発行)、垣内松三著「文芸哲学」(昭和十二年五月十日発行)ほか、この講座には、国語教育に関連する諸学問からの論が多い。(講座としては、「国語科学講座」(師範大学講座国語教育)などが、戦前にはある。)

戦後においては、刀江書院の「国語教育講座」に、その第五巻(昭和二十六年七月十日発行)には、「各国の言語教育」とともに、「国語教育問題史」が取りあげられている。

- (イ) 国語教育問題史……………西尾 実
- (ロ) 国語教育の回顧と展望 一：保科 孝一
- (ハ) 〃 二：井上 越
- (ニ) 〃 三：石森 延男
- (ホ) 〃 四：芦田恵之助
- (ヘ) 〃 五：山口喜一郎

西原慶一氏の戦後の著述には、次の国語教育史がある。

「日本児童文章史」(昭和二十七年十二月十五日発行、東海出版社)

「近代国語教育史」(昭和四十年十一月三日発行、穂波出版社)ほか、数多く論文や著書が国語教育史に関してなされている。それらについては、見ていないものもあるので、今後、参考としたい。こ

これらの一つ一つが、現在の国語教育につながっているので、資料の完備が望まれる。

なお、関係するものとして、桜井役著「日本英語教育史稿」（昭和十一年三月五月初版、敝文館）（昭和四十五年九月十日翻刻版、文化評論社出版）がある。

#### 四 国語教育と国語教育科学

垣内松三氏の「独立講座 国語教育科学」（文学社）は全十二巻の構想であったが、九冊しか出版されなかった。垣内松三著・興水実編「国語教育科学」（昭和三十六年八月二十日発行、三省堂）によると、その「序」に、興水実氏は、「先生の思想のもっとも円熟した時代に、その国語教育研究の結集として、国語教育科学建設の祈願をもって書かれたもので、先生のいろいろな著書の中でも、もっとも重要なもののひとつである。」と述べている。

私は、この十二巻と九冊との関係を取りあげ、著者の構想と執筆過程と、この独立講座の国語教育科学についての他者の考え方とを、各巻名を順序で並べる操作によって、考えてみたい。

まず、「国語教育科学」全十二巻の構想は、「国語教育科学概説」の奥付によると、次のようである。（1から12までの番号は、巻の番号である。）

- 1 国語教育科学概説（昭和九年四月三十日発行）
- 2 国語指導論
- 3 国語教材論
- 4 国語学習論
- 5 国語教育論史
- 6 国語陶冶論
- 7 国語解釈学概説
- 8 国語表現学概説
- 9 国語教育史

- 10 国語教育の諸問題（上）
- 11 国語教育の諸問題（下）
- 12 国民精神と国語教育

右の2から12までの発刊順序予定は、4（五月予定）、3（六月）、10（七月）、5（八月）、8（九月）、7（十月）、9（十一月）、6（十二月）、2（一月）（注 昭和十年）、11（二月）、12（三月）となっている。

九冊の最後として出版された第十一巻「国語教育の諸問題（下）」（昭和十年十月三日発行）によると、発刊の順序は、1（四月既刊）（注 昭和九年）、4（五月）、3（六月）、8（七月）、10（八月）、7（九月）、5（十月）、2（十一月）、11（九月）（注 昭和十年）となっていて、構想の巻数順ではない。第二巻から第十一巻までに、一年間のひらきがある。9、6、12は未刊である。

この九冊を、興水実氏は、「序」において、1、7、8、3、4、2、5、10、11の順に並べて、独立講座の体系を新しく編集されている。石山脩平氏は、その著「諸家国語教育論叙説」（岩波講座国語教育、昭和十二年四月十日発行）において、順序を、1、12、10、11、8、7、4、6、3、2、9、5とし、「そこで内容の性質上私見によって体系づけるならば凡そ次の如くなるであろう。」としている。

- 1（総論的展望）
  - 12、10、11、8、7（国語政策及び基礎科学）
  - （1、12、10、11、8、7 基礎理論）
  - 4（国語教育の前提たる学習事実）
  - 6（国語教育の目的・任務）
  - 3（国語教育の教材）
  - 2（国語教育の方法）
  - （4、6、3、2 中心理論）
  - 9、5（国語教育事実史及び理論史）…（史的背景）
- なお、石山脩平氏は、次のように述べている。



然しながら私が特に注意したいのは、垣内氏自身が国語教育科学建設に関して抱かれてゐる意図と見識とである。所謂基礎科学（垣内氏はこれを「隣接科学」と呼んで居られる）が如何に増大しても、それだけでは国語教育科学は出来ないといふ点を明かに指示せられたことこそ、私が本講の最初から（特に明治書院や岩波書店の講座に関して）強調した所と合致する重点である。

この「諸家国語教育論叙説」には、国語教育の体系として、丸山林平著「国語教育学」（昭和七年十一月十四日発行、厚生閣書店）を高く評価している。保科孝一氏の「国語教育学の建設へ」に続くものとして、この丸山氏の「国語教育学」のあることは、野地潤家氏の研究によっても、知ることができる。丸山氏は新たな段階を創建したといえよう。また、明治書院の「国語科学講座」も、国語教育史の重要な資料である。しかし、その構想を、石山脩平氏は、概観して、基礎科学が多く、国語教育自体は、やや少ないという評のようにみえる。

戦後においては、石井庄司氏編集「国語教育」（学校教育全書7国語教育、昭和四十一年六月三十日発行、全国教育図書株式会社）に、国語教育の研究が、結集している。歴史的現実としての、生きている国語の学習指導は、このような資料によって把握できるであろうと思う。全体が国語教育学であり、国語教育科学への志向をもつものである。

## 五 国語科教育と国語科教育学

国語教育史における教育的事実は、国語の学習指導実践の事実が主であると思う。国語教育を広義なるものと考え、そのなかで国語科教育は、学校教育の教育課程の一教科である国語科に関するものとして、現在の考え方である。したがって、教育史を叙述する際、国語科で何を学習指導するかを研究し、それを学として構造化する国語科教育学の内容を基にして、事実を述べ、あるべきものを求めることになる。新しい用語による興味本位のものでなくて、現在、国語科

教育学が提唱されているのは、国語科を、教育課程のなかで改めて考えようとしているためと思われる。

国語科教育学は、教育課程のなかで国語科の実践を効果あらしめるための学である、私は思う。実践の技術に関する国語教授法、国語教育方法は、各科教授法的な立場であるとも考えられる。現在では、各科教授法は指導技術だけになる危険があり、明治初期以来のやや翻訳的な方法の名残りであるともいえよう。しかし、新しく生かされる方法もあるのである。国語教育学は、あるいは、国語教育科学は、教育の根本にあるものの究明をして体系を整えているところに、科学性をもっている。従前のこれらのものを生かしながら、よりよき学問となるように、新たな主観性をもって、国語科教育学は構想されている。国語を豊かにすることを図りながら、関係する学問の營養も吸収しつつ、体質をよくする改造強化をめざしている。国語科とは何かという原点にたちかえり、合理的な構造、精選された内容を研究しているのである。

次に、国語科教育学は、諸教科と同じように、教科教育学としての発想があると思う。国語科だけのことを考えないで、調和と統一のある教育課程のなかの一教科としての国語科の性格、任務を確認しなければならぬ。この場合、学校教育の教育課程上の問題解決を図ることになり、国語と教育の関係を根本において考えなおすことになるであろう。国語科は、一教科であるとともに、学校教育全体の基礎であり、根本であることを忘れてはならない。

他の教科と同じように、国語科教育学の教科教育学としての発想は、国語科だけの独善を考えないで、調和と統一のある教育課程のためである。また、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学の縦の系統を立てるためである。従来、国語科教育学が小学校だけで熱心に研究されていたようであったのが、幼稚園、中学校、高等学校、大学の教育全体で研究されるようになってきたのである。系統と関連の関係を有機的にして、体系を立てることによって、実践の効果が期待され



るのである。

このように考えると、国語科教育学は、国語科の主体性、国語の学習指導の基本性、教育課程の調和性と統一性に関するもので、自己限定と拡先を図り、教科教育学としての志向をもつことになる。各科教授法が教育学の応用であるというのとは異なり、教科教育学はそれぞれの主体性のあるものを期している。そのために、教育課程との関係から、各教科に通ずる汎教科教育学の確立が要望されている。その汎教科教育学に、国語そのものがどのような役割をもつかを考えなくてはならない。

国語科教育については、教員養成学部教官研究会国語教育部会編著の「国語科教育の研究」(昭和四十一年三月発行、金子書房)が画期的な研究をしている。教科としての国語科をいかに理解するかについて、今後のために指標となる貴重な文献である。望月久貴、弥吉晋一、山根安太郎の三氏が、編集委員代表である。

国語科教育学については、奥水実氏、志田延義氏の著述がある。

奥水 実著「国語科教育学」(昭和三十年三月十日発行、金子書房)

奥水 実著「国語科教育学入門」(昭和四十五年十二月五日刊、明治図書出版株式会社)

志田延義著「国語科教育学」(昭和三十五年九月二十五日発行、桜楓社)

九月十日発行、桜楓社)

志田延義著「国語科教育学」(その昨日から明日へ)(昭和四十七年

九月十日発行、桜楓社)

志田延義氏の旧著は、簡潔にして原初の考察の要点が示されている。新著のものと合わせて、その思考の過程を知ることができる。この国語科教育学の構想は、新著のまえがきによると、「教科教育(私の場合)は国語科教育であるが」の在り方を通して教員養成制度に就いて改善・改革を要する部分や面の多いことに想い至り、殊に戦後の新しい考え方を踏まえた国語科教育研究の科学化・学問的体系化に参ずることが、職務上私に課せられた当面の責務であるとしてまで考えるよう

になった。」とある。制度上の問題もあり、いくたの困難点があったと思われる。教科教育の一つとしての国語科教育学の性格は、教科教育学および汎教科教育学の可能性において構想されている。新著で、国語科教育学の構造として支援科学との関係が述べられていることは、特徴である。(この関係は、旧著では、図表化されている。)これらの構造で、国語科教育は自体が豊かになり、強化されることになるのである。数多くの学問と研究とのかわり合いを、国語科教育の「主体性」において、統一するのが望ましいのであるが、それには少なからぬ努力がいると思う。その支援科学は、次のように、二つに分けて示されている。

(1) 方法的・基礎的支援科学としては、児童・生徒の実態把握に始めて学習指導の方法を確立するために、教育心理学・発達心理学・幼児心理学・児童心理学・青年心理学・生理学・大脳生理学・人間関係学・教育史・教育政策学・教育環境学・学校教育学・教育技術学・診断治療予防学・教育工学などが考えられると共に、実験・調査等の基礎となる推測統計学も加えておきたい。

(2) 素材的・内容的支援科学あるいは研究は、教科の目標と共に教材内容を組織し教育課程を編成するための支援学もしくは研究事項となるものであるが、これを仮に 1 内容教材というべき関係のもの、2 社会的機構にかかわる傾向の強い教材関係のものに分けて挙げると、

1 ア 言語理論・言語心理学・言語社会学・意味論・音声学・文章構成法・国語学・国語国字問題(国語政策)・漢文学

イ 文学論(詩論)・文体修辭学・国文学・欧米文学研究・児童

文学研究・朗読法・神話学・漢文学

ウ 論理学・討議法

エ 書道史・名跡研究

2 ア 文書実務学・情報生産学

イ マスコミコミュニケーション学・新聞学・放送学



## ウ 演劇学・映画学

興水実氏は、先に「国語科概説」（昭和二十六年一月三十日再版、有朋堂）などの数多い著作があるが、「国語教育学」で垣内松三氏の体系を祖述している。国語科教育学については、「国語科教育学入門」のほうが整理されていると思われるので、これによると、簡明にその志向が示されている。

国語科教育学は、一箇独立の専門分野として、専門的に研究され、専門的に論議・講説されるべき段階に達していると思う。

「国語教育学」として、あえて「学」という名前をつけようとした人にも、そうした独立の気持ちはあった。垣内松三先生の「国語教育学」（昭和九年）にも、こうした国語教育研究の独自性はつきりした認識があった。

わたしは、今、それを、「国語教育学」でも「国語教育学」でもなく、「国語科教育学」という形で考えて行こうとする。

国語教育の基礎としての言語観については、「国語科教育学」のなかに、言語の人間形成と言語技術とを述べており、「人間形成と言語技術の学習指導とは決して別々のものでなく、人間形成論のもっている深い趣意から言語技術の学習指導を見なおして、その有効なものを取りあげ、よろしくないものを捨てるといふ方向に進むべきである。」とある。

「国語科教育学入門」のほうには、注意すべき点として、国語科教育の基本的考え方が記述されている。それによると、国語教育学の基本概念としての「言語生活」、国語科教育学の基本概念としての「国語の力」とある。この二点の対比について考えると、これは国語教育史の現段階として最も根本的な問題点である。

戦後、国語科の学習指導において、経験主義か、能力主義かということが論議されたのであるが、この「言語生活」か「国語の力」という対比は、見すごすことのできない点である。「言語生活」の主張は、西尾実氏の創見によって今までのものを確かにしたと思う。国語

教育学、国語教育学、国語科教育学は、時の流行性と発展性のために、その時代によってなされたものであって、同一の方向への努力であると思われる。「言語生活」も「国語の力」も、同じことをいっていると私は思う。

同じく、この「入門」において、「国語科教育という営みの本質は何か。」として、次のことを興水実氏は述べている。

- (1) 生活に必要な国語の能力を身につけさせる教科である。
  - (2) 理解力・表現力を養う教科である。
  - (3) 言語生活の向上を目的とする教科である。
  - (4) 言語文化の獲得と創造をめがける教科である。
- これを見ても、この(1)、(2)、(3)、(4)は四者で強力な構造をもっていると思う。戦後の「学習指導要領」を見ても、この大綱は貫かれている。

国語教育史の研究にあたって、学習指導の事実を進めていく国語科の性格と目標の認識は、出発点である。最後に、私は先人のあとをたずねてきた現時点で、特に中学校国語科については、次のように考えている。

教育は、理想にむかって、人間本性（身体、言語、数量、芸術、道徳）を陶冶し、知識を広め、技術を高めることによって、人間を育成するのである。このなかにあって、国語教育は、生活力の強くなるように、全人的に国語によって心身を成育することが眼目である。したがって、教育課程にあって、中学校国語科の性格は、左に示したようなことであるが、全体として、言語の機能を自覚させ、国語の実践を向上させるものであり、世界に生きる日本人として生活を営む国民の国語の力を養い育てていくものである。

(一) 基礎学力を育てる教科である。

(二) 独自の性格をもった教科である。

- 1 言語の機能を探究して、言語の能力と態度を養い育てる。
- 2 国語と生活と文化との関係を考慮して、国民教育の基礎を確



かなものとする。

### 3 国語の特質を理解させる。

付言

国語教育史を研究して叙述するための試みとして、諸観点、諸問題をとりあげてきたが、主として垣内松三氏の著述をめぐって、国語科教育への志向をさぐった結果となった。明治初期の研究のために、近代期の時代区分、学制の成立をめぐる問題点などを、続けて研究したいと思う。また、資料については、目のおよばなかったものがあるので、補ないたい。